

首里城石積みからの探究について

伊佐 真幸¹・新垣 英隆²

¹国営沖縄記念公園事務所 首里出張所 （〒903-0812 沖縄県那覇市首里当蔵町3丁目1番地）

²国営沖縄記念公園事務所 首里出張所 （〒903-0812 沖縄県那覇市首里当蔵町3丁目1番地）。

首里城復元整備している石積みは、多くの特徴、魅力を有してるにも関わらず、よく知られていない。そのため、発掘調査で現れる形状、特徴を生かした首里城での復元整備の紹介、石積みから広がる魅力を探究するものである。

キーワード 遺構、城（グスク）、復元、魅力

1. はじめに

首里城の特徴といえば、屏風のようなきれいな曲線を描く城郭石積みに目を奪われる。正殿等の建物のみならず、この城郭も過去の大戦でそのほとんどが失われた。首里城では、わずかに残る発掘遺構や資料、古写真、古老からの証言等からその美しい城郭を復元してきた。現在も首里城地区は正殿裏の御内原（おうちばら：国王と家族と女性の空間）復元工事を進めており、石積みによる復元施設も多数残っている。

本報告では、首里城を始めとする各地の城（グスク）の石積みの特徴を紹介すると共に、首里城発掘調査から現れる石積み遺構の形状と特徴、首里城で復元整備した石積みの紹介、更には城（グスク）の歴史などを説明する。



首里城

2. 内容

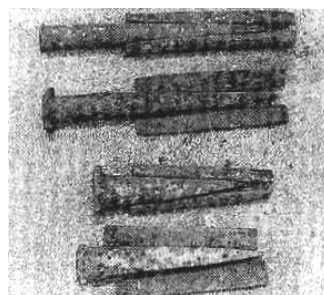
(1) 県内各地の石積みの特徴

沖縄県内には大小さまざまな城（グスク）があり、その総数は約300あると言われている。

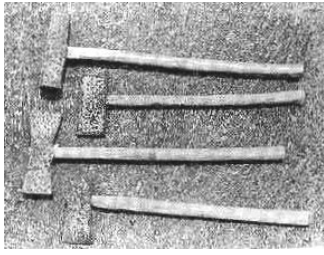
グスクは、聖域を取り込んで形成されているのが一般的で、ほとんどのグスクは小規模であるが、周辺地域が淘汰される中で、次第に規模の大きなグスクが出現するようになってきたと考えられている。

時代年表			
900	安時代	グスク時代	907 唐滅亡 936 高麗、朝鮮半島を統一 960 宋おこる
1000	1080 院政始まる 1187 寿永即位と伝う 1192 源頼朝、鎌倉幕府開く		1096 第一回十字軍 1115 金の建国
1200	鎌倉時代		1215 イギリス大憲章制定 1260 フビライ即位(後醍醐)
1300	1274 蒙古襲来(文永の役) 1314 三山対立始まる 1338 足利氏、室町幕府開く 1392 南北朝合一	古琉球	1295 元軍、沖縄本島に襲来 1368 明建国(太祖洪武帝) 1369 新法、朝鮮を統一
1400	南北朝時代	三山時代	1404 豊後徳はじめて琉球 1468 パスコ・デ・カマデ・インド航路発見
1500	室町時代	第一尚氏王朝	
1600	1470 尚円即位 1477 尚貞即位	第二尚氏王朝前期	
1700	安土桃山時代	第二尚氏王朝後期	
	1590 豊臣秀吉、全国統一 1603 徳川家康、江戸幕府開く 1609 島津の琉球侵略 1634 尚豊賢、親政となる 1728 親臨、三司官となる	近世琉球	1644 明滅亡 1688 イギリス名義革命 1776 アメリカ独立宣言

時代は、800年後半から1400年前半をグスク時代、三山時代と言われ、自然のめぐみに頼る暮らしから農耕社会へと移り変わった時代で、かしの出現など、世の中の仕組みが大きく変化した時代となり、土地を巡る争いから戦いに備えて、石垣で囲ったり、小高い丘に住居を構えるとするグスクがたくさん作られ、城塞化することとなる。首里城を頂点とした沖縄のグスクは、そのほとんどが琉球石灰岩を主とした石積みで築かれており、サンゴや貝など生物の死骸が堆積したもので、岩石としては軟岩に分類され花崗岩などに比べ、加工が容易であることが大きな特徴となっている。



琉球石灰岩は、沖縄県の中南部を中心に琉球列島全域に広く分布しており、はじめは転石状のものを集積して郭(囲い)を構えたものが、鉄器の導入(左：ノミ下：オノ、ハンマ



一) などにより石切加工がなされ、高度な石積み技術へと発展していったと考えられている。

1300年後半の三山時代（北山王、中山王、南山王）よりある大型グスクの石積み特徴を述べる。

北山領域であった北部は、山原（やんばる）と称されるように、大部分が山地で、山脚は急な地形をもって海岸に迫っている。



今帰仁城趾

この領域にある黒色の古生代石灰岩石は、白色の琉球石灰岩とは異なり、重く、硬いため、刃がたたなかったと思われる。このため、今帰仁城跡石積みは加工せず自然石を積み上げる「野面積み」しかみられないという特徴がある。



今帰仁城趾の石積み（野面積み）

ここの「野面積み」は、丸ないし角張った自然石と平たい盤状の自然石を混用しながら1段（層）を単位として横目時を通すように積み上げられている特徴があり、この特徴は、各グスク、時代等によって異なるので、注意して見るとおもしろい。

中部は、山地が殆ど見られず、琉球石灰岩に覆われた低い丘陵、台地上緩斜面が広く分布し、勝連半島や宜野湾、浦添、中城の地域では島尻層群を基盤に広く石灰岩が乗るテーブル状の台地が多く見られる。この石灰岩台地の縁では急崖をつくっているため、この地形を巧みに取り込む形で多くのグスクが築かれ、過去より沖縄の中核部となった。中山王が構えた首里城を中心に浦添城、中城城や座喜味城、勝連城など著名なグスクが集中的に分布する。



勝連城趾

南部は、シルト質泥岩を主とした島尻層群が広く、この基盤に広く石灰岩がのる場合には、テーブル状地形を造る。内陸部では起伏に富む丘陵を形成していることから、これに南部のグスクは形成されている。



糸数城趾

(2) グスクの歴史

「グスク」という定義は、沖縄史研究の中でもいろいろな学説があり、祖先の葬所を囲ったもの、神の礼拝所であったとされる聖域説。豊かな土地を求め内陸へ移動、その土地に村を形成、各村の縄張りとしての境界線となった集落説。村同士が土地を巡った争い、戦いに備えた石垣になり、その村からの頭、支配者の出現による、その居城説。領土を巡る戦国時代に入ると防衛重視となった城郭説などがある。また、これらを含めた時代差的な展開の相違からいえば、どちらも矛盾はないとする説があるなど、沖縄には永きに渡る時代と共に、さまざまな土地、形状等に対しグスクと呼ばれる場所が広く分布し、存在していたことがわかる。

また、シロというと天守閣のように高い石垣と長く続く白壁を連想するが、そもそも1500年後半の近世になってからはじめて登場するもので、ここでの城郭石積みのグスクと比較する場合は1300年頃の中世のシロでなければならず、グスクが築かれた時代には、本土では土塁や塀をもつシロしかなかったことから、築城技術の歴史からいえば沖縄のグスクは、日本のシロより200年以上も古くから発達したことになり、この発達、中国との交易を通じて大陸文化を吸収した結果であり、そのときに石工技術についても大きな影響を受けたからであろうとされている。

これらグスクの頂点である首里城は、その石工技術の最高峰をもって造られたものといえる。

(3) 首里城発掘調査から見た遺構の形状と特徴

首里城の城郭は、琉球石灰岩の岩盤の上に設置されているものが多く見られる。



琉球石灰岩の岩盤に積まれた石積み（首里城の京の内）

盛土上に設置する場合はその基礎面に栗石を厚く投入し、十分な地盤反力を確保できるように築造されている。更に、幅のある城壁では、土圧軽減をさせる効果を期待して内部に2、3重の裏込材（野面積み）を積み立てているものも多く確認されている。下の遺構写真は、手前が往時石積前面、その内側に野面積みが確認できる。



首里城外郭石積（久慶門付近）

下写真は、左の復元石積みに繋がる石積みの遺構で、角を曲線で90度のカーブを描き正殿際（上側）へ向かう形状となっている。石積みの裏込は栗石が積み重ねられており、これは、本土では土、砂を用いることが一般的であることから、沖縄でしか見られない大きな特徴である。本箇所は今年度復元する。

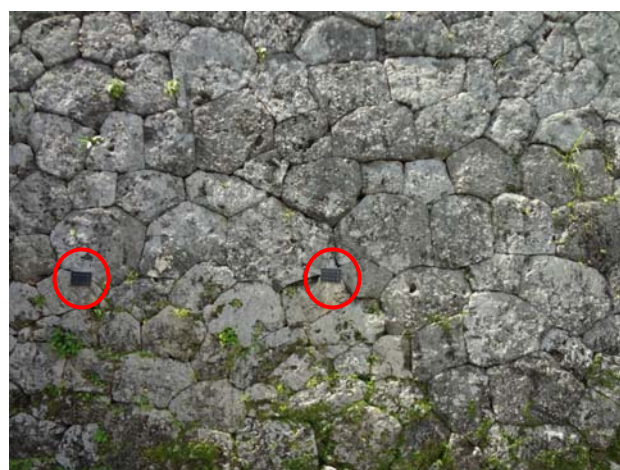


淑順門西側石積み遺構（平面）

このように現れた遺構の姿、形状は、これを遵守し、遺構をそのまま生かして、この上に石積みを形成、復元している。首里城内では、それがわかるように下写真のようなプレートを取り付けている。

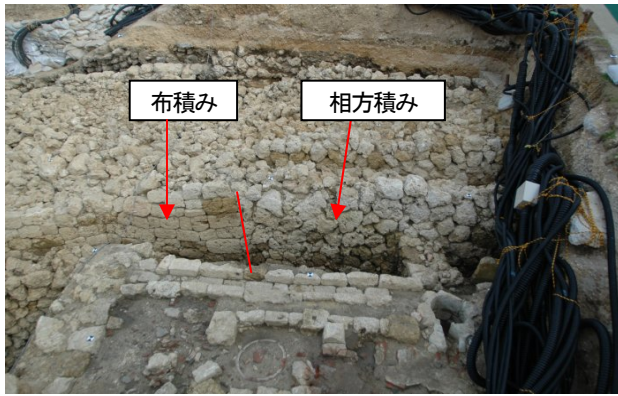


プレート拡大



プレート位置（遺構と復元の境界に設置）

他にも下写真のように断面が途中から変化している遺構が発見されることがあり、これについても遵守し、復元している。



淑順門西側石積み遺構（断面）



石積み変化箇所（復元）

石積みにはいろいろな形態や構造があり、自然石をそのまま使う野面石と加工を施す加工石と呼ばれる用材を使用されており、積み方としては大きく3種類の「野面積み」「布積み」「相方積み」に分類される。

上記写真の布積みは、長方形に加工し横目地が通るように積む方法で、相方積みは5ないし6角形に加工し互いにかみ合うように積む方法である。もう一つは、先ほど説明した野面積みがあり、首里城にはこれを見る場所はありませんが、野面が原初的であり、次に布積み、その後に相方積みへと積み石技術の変遷が見られる。



安慶名城趾の野面積み

また、先に述べた今帰仁城の石積みの特徴や、地域（北部と中南部）による石質の違いなどから、沖縄の地

質を知ることができる場合や、布積みと相方積みの混在からは、地震等により崩れた部分を修復したり、増改築工事を行ったことなど時代背景を知る手がかりになる場合もある。

(4) その他 首里城石積みの特徴

首里城の石積み特徴をいくつか紹介する。

① 隅がしら

折れる角をただの曲線で納めることをせず、あえて、天を指すかのような形。何を意味するのか今もわからないが、琉球の美意識を示す1つである。



瑞泉門近くの隅がしら

② アーチ門

なめらかな扇状にあり、真下から見る石数を少なくし、石目地をきれいに納めた門である。



歓会門



久慶門

首里城の4つの外郭門は全てこの形式である。高度なアーチ技術を要するものである。

③ 双壁門

内郭門は、アーチ門より古い石技法の双壁門であることから、門の形状を見るだけで時代の新旧を知ることができる。



瑞泉門



漏刻門

④ 武者走り

石積み内側には、外を見張るために設けられた歩行用の武者走りもきれいな曲線を描いている。



東のアザナへ向かう武者走り

⑤ 曲線美

内郭城壁と外郭城壁の曲線石積みは、杜と空、海をも融合するやわらかな姿である。



久慶門から奥の歓会門を結ぶ石積み曲線

(5) 首里城の工夫

首里城の復元は、往時の姿を再現追求することにより、遺構及び古写真、古図、資料等がないものは復元せず、あくまで根拠があるものだけを再現してきている。

流用可能な遺構は、これを利用し、城郭のみならず石畳においても使用しており、往時の人達が歩いた場所を現代でも歩むことができるように、歴史空間を体感できるように施工している。



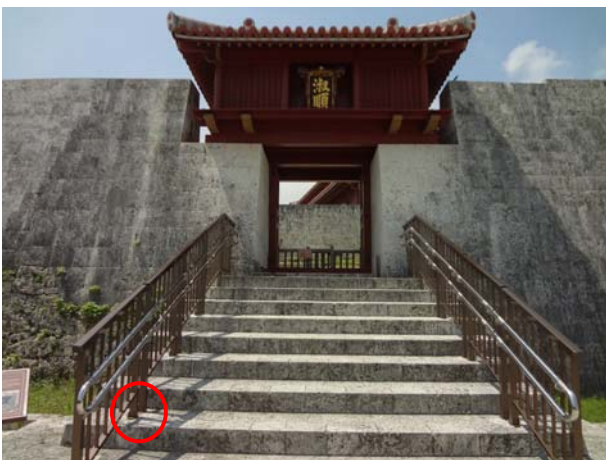
右掖門から淑順門までの石畳（首里城）

更に、歴史的景観に配慮し、現代工作物が目立たないように配慮している。来園者の安全性を確保するための手すりについて、これもあくまで復元ではないとする理念から、いつでも往時の姿を現せるように、すべての手すりが「脱着式」の構造としている。

結果、首里城を舞台とした往時の姿を状況に応じて再現することが可能となり、これは映像と共に、これを視たものへ感動を与えることとなった。首里城及び各地を舞台にしたNHK「テンペスト」を視られた方、視られていない方も機会があれば注意して見て頂きたい。



脱着式手すり（石蓋で隠れる構造）



淑順門（首里城）



NHK ドラマ「テンペスト」より

3. 結論

首里城の石積みにはたくさんの特徴と共に、多くの魅力が詰まっていることがわかる。このことは、当初より首里城復元整備の意義及び基本方針を貫き、あらゆる資料検証、根拠を見だし、学識経験者、古老からの聞き取り等の確認、検証をもって、これを多くの技術作業者達の努力によって積み重ねてきたことによるものである。

この結果、毎年200万人以上の来園者が訪れるっており、観光のシンボルとしてだけでなく、琉球王国がかつて約450年に及ぶ中国との交易より繁栄し、国際社会においてどのような立場、努力をもって維持してきたのかなどの歴史学習ができる施設でもある。また、地元にとっては、大戦による大きく、深い心の傷、溝を埋める精神的な役割をも担っている。

今後の首里城復元整備についても、これらの背景等を理解、勉強し、努力、協力の上にこれを完成させることを目指すものである。

4. 今後の課題

首里城では多くの石積みが整備がなされながらも、どちらかというと脇役に徹しているものとなっており、その魅力を十分に伝えることができていない。そのため、石積みを通し、首里城を始め、各地に広がるグスクがもつ石積みの特徴や魅力を情報発信することで、歴史文化を広く知らしめる学習の場や、更には、沖縄の観光資源へ結びつける一つとなるように、今後、展示・企画等の立案、構築を進めるためのきっかけになれば幸いである。

5. 参考文献の引用とリスト

参考文献

- 1) 沖縄県埋蔵文化センター：首里城跡-淑順門地区発掘調査報告書
- 2) 沖縄県埋蔵文化センター：首里城跡-京の内跡発掘調査報告書Ⅲ